

# 大豆時期別技術対策情報 22 - 2

平成22年 6月15日  
新潟県農林水産部

## 出芽期から開花期の管理のポイント

出芽期から開花期は、梅雨期にあたり、湿害が多発する時期である。湿害を受けると、生育不良や雑草害により収量・品質が低下するので、排水対策を徹底する。

- 1 除草、倒伏防止及び根圏の改善や根系の発達による生育促進を図るため、中耕・培土を適期に2回実施する。
- 2 湿害を防止するため、適宜、排水溝を点検・整備するとともに、中耕・培土後は畦間の溝を排水溝に連結する。
- 3 地力の低いほ場では、ちりめんじわ粒の発生軽減と増収を図るため、培土期の追肥に緩効性被覆尿素肥料を活用する。
- 4 病害虫の発生状況に応じて、適期に防除する。

## 大豆の播種・生育状況

- 1 大豆単作の播種作業は、平坦部では5月第6半旬から始まり、6月第1半旬に盛期を迎える見込みで、5月下旬の降雨により開始時期は遅れたが、その後は好天により順調に進んでいる。
- 2 麦あと大豆の播種作業は、大麦収穫の遅れから、6月第5半旬頃から始まる見込みである。
- 3 播種の早いほ場において、出芽・苗立ちは概ね良好である。

## 技術対策

### 1 中耕・培土

- (1) 中耕・培土は、開花始めまでに2回行う。開花期以降は断根により、生育抑制や落花を招くので行わない。
- (2) 1回目は、播種後25日頃の第2複葉展開期頃に子葉節まで土を寄せる。2回目は、1回目から約2週間後の第5複葉展開期頃に初生葉節まで土を寄せる。培土が不十分で茎元がくぼんでいると、不定根の発生や倒伏防止などの培土効果が十分発揮されないので、茎元までしっかり覆うよう培土する。また、最終培土の高さは15cm程度とし、収穫時に支障のない高さにとどめる。
- (3) 播種後の土壌処理除草剤を散布できなかったほ場では、早めに1回目の中耕または中耕・培土を実施する。
- (4) 出芽が不揃いのほ場では、生育の早い大豆に時期を合わせて中耕を行い、培土の高さは低めにする。
- (5) 土壌処理除草剤を散布したにもかかわらず雑草の発生が見られるほ場では、早めに1回目の中耕・培土を行う。

## 2 排水

- (1) 畝立て播種したほ場や中耕・培土後は、畦間に水が停滞しないよう、畦間の溝を排水溝に連結する。
- (2) 大雨の前後は、排水路及びほ場内の排水溝の点検・整備等を行う。
- (3) 湿害を防止するため、暗きょ栓は開放しておく。但し、地下水位が低く乾燥しやすいほ場では、干ばつによる落花、落莢を軽減するため、降雨等により地下水位が急激に上昇した場合を除き、梅雨明け後は暗きょ栓を閉めておく。

## 3 追肥

- (1) 湿害による葉の黄化や生育不良の症状が見られたら、中耕・培土等により排水を促すとともに、速効性肥料を窒素成分で10 a 当たり 1 ~ 3 kg追肥する。
- (2) 地力が低く、収量が低い(目安として実収200kg/10 a 以下)ほ場では、ちりめんじわ粒の発生軽減と増収を図るため、緩効性肥料(シグモイド型被覆尿素60日タイプ)を追肥する。施用法は、2回目の中耕・培土時(7月10日頃)に、株元に条施して、培土により覆土を行う。施用量は、窒素成分で10a当たり6 kg程度とする。但し、基肥に緩効性肥料を施用した場合は行わない。

## 4 除草剤による大豆生育期の雑草防除

- (1) 中耕・培土が計画どおり実施できず、雑草が抑えられない場合は、農作物病害虫雑草防除指針を参考にして、生育期処理除草剤を適正に使用する。
- (2) ほ場に発生した草種に応じて最適な薬剤を選択する。なお、ベンタゾン液剤は品種によって薬害の程度が大きくなり、また、エチルチオメトン粒剤との近接施用は薬害を助長することから、農作物病害虫雑草防除指針の留意事項を遵守する。
- (3) 除草剤を畦間処理する場合は、大豆にかからないよう飛散防止カバーを用いて散布する。なお、土壌処理除草剤は中耕培土後の雑草発生前に、茎葉処理除草剤は雑草が大きくなると効果が劣るため、適期を逃さず散布する。また、茎葉兼土壌処理除草剤を畦間・株間処理する場合は、専用ノズル等を用いて散布する。

## 5 病害虫防除

- (1) ネキリムシ類(タマナヤガ・カブラヤガ)の発生と防除
  - ア 発生量はやや少ないと予想される(平成22年5月27日、病害虫防除所公表)。
  - イ 今後の発生状況に注意し、多発生が予想される場合は、殺虫剤を施用する。
- (2) アブラムシ類の防除
  - ア アブラムシ類は直接の吸汁害の他に、ウイルス病罹病株から健全株へウイルスを伝搬し、褐斑粒の発生原因となる。
  - イ 播種時の粒剤並びに種子塗沫処理剤の効果は30日程度であることから、播種1か月後の発生に注意し、発生が認められたら7月上~中旬に殺虫剤を茎葉散布する。
- (3) ウコンノメイガの発生と防除
  - ア 前年に発生した地域では、本年も発生する可能性が高いので発生状況に注意する。
  - イ 雑草の多い山地に近い地帯で発生が多い傾向がある。
  - ウ 播種時期の早いほ場や生育が旺盛で葉色の濃いほ場は被害を受けやすい。

エ 7月中旬以降に葉巻きが見え始めたら早めに殺虫剤を散布し、葉の食害を防いで莢数の確保と小粒化の防止に努める。

## 6 時期別生育量の目安

- (1) 大豆の生育量が小さいと、雑草害による収量・品質の低下が懸念されるため、播種後40～50日の主茎長と雑草の発生状況に応じて、早期に雑草対策を行う。
- (2) 主茎長の目安は、標準播種（5月末頃）のエンレイの場合、播種後40日（7月10日頃）で23cm、播種後50日（7月20日頃）で38cm、開花期で50cmである（図参照、晩播は表を参照）。これより小さいと、条間が大豆葉で被覆されるまでに時間がかかり雑草害が増大する危険が高いので、雑草の発生状況を確認した上で、中耕作業を追加したり生育期除草剤を散布したりする。なお、主茎長は1～2回の中耕・培土後も地際から測定する。

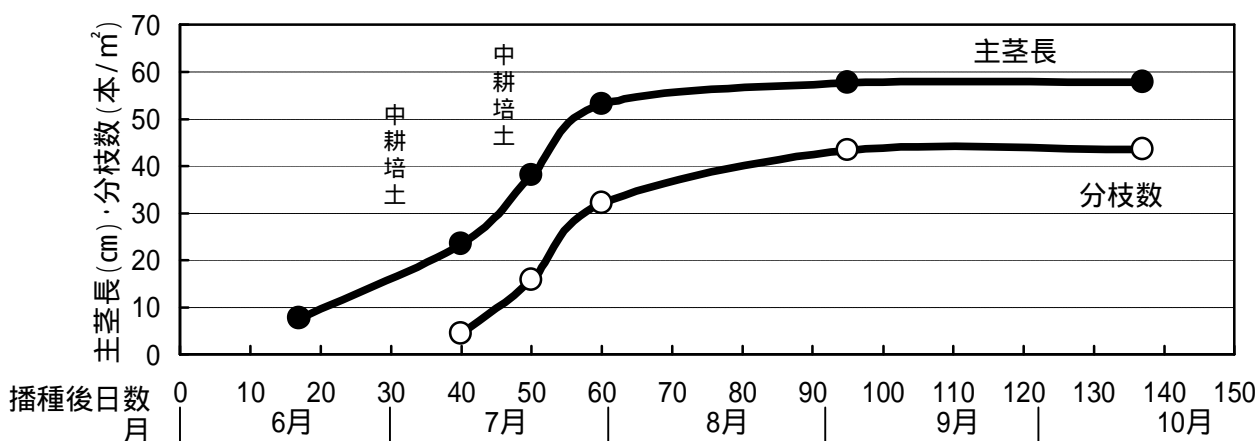


図 実収300kg/10 aを確保するための主茎長と分枝数の生育指標（標準播）  
注)品種：エンレイ、栽植密度：8.9株/m<sup>2</sup>

表 晩播の時期別生育量の目安

播種期 (月/日)	発芽期 (月/日)	播種後20日		播種後30日			播種後40日			開花期 (播種後 42日) (月/日)	成熟期 主茎 長 (cm)
		主茎 長 (cm)	主茎 節数 (節)	主茎 長 (cm)	主茎 節数 (節)	分枝 数 (本/m <sup>2</sup> )	主茎 長 (cm)	主茎 節数 (節)	分枝 数 (本/m <sup>2</sup> )		
6/20	6/27	14	3.9	22	6.7	0.6	35	9.8	14.6	8/ 1	57

注1)作物研究センター大豆気象感応ほデータ(平成8～17年の平均値)

注2)品種：エンレイ、栽植密度：13.3株/m<sup>2</sup>

【照会先：経営普及課普及指導員（専門技術指導担当）水沢誠一 TEL 025-280-5302】